

---

# 呼び名は『しあわせ』

ユエ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

呼び名は『しあわせ』

### 【コード】

N0721C

### 【作者名】

ユエ

### 【あらすじ】

へんてこ方言な男の子とちよっぴり素直じゃない女の子の物語。

呼び名は『しあわせ』

(前書き)

この作品は『名小説』企画に参加しています。

呼び名は『しあわせ』

呼び名は『しあわせ』

二学期の中頃になると、体育祭と文化祭で出来上がったいわゆる『イベントカップル』が増殖して校内は俄かにラブ濃度が増す。ま、人恋しい季節でもあるしね。そんな即席カップルを私はこれまで馬鹿にしていた。どーせ、イベントラッシュ　クリスマスや年末年始。長くて、バレンタインとホワイトデー　が終わればあえなくバイバイするんでしょ、と。

なのに、今年は私も増殖組の一員になってしまった。

「やよちゃん、ボクと付き合ってくれへん？」

私を『やよちゃん』と呼び、妙な方言を使う男　瀬戸　修吾に文化祭のとき告られた。はつきり言って全然タイプじゃない。茶髪をゴムで結ぶような男は嫌いだし、優男な感じのタレ眼も好きじゃない。好みじゃないけどOKしたのは……魔が差したから、としか言えない。私も人恋しかったのかも。

その魔が差した彼氏は、生徒会室で仕事する私の横で今はパツクジューズ片手に暇そうにしてる。

「なあ、やよちゃん。もう帰らへん？　誰も残つとらんよ」

パイプ椅子をギコギコ鳴らしながら唇を尖らせる顔は、彼の精神年齢が表れてる気がした。

修吾は生まれだけ関西らしい。けど親が転勤族だったから色々混じった妙な方言を使う。前に「そのゴミ投げて」と言われたから投げつけてやったら「ちゃうやーん」と怒られた。『投げる』は北海道では『捨てる』の意味らしい。知るか。

「ダメ。生徒総会が近いし、それに次期生徒会に引継ぐ資料も作んなきゃ」

なんだかんだ言っても、修吾は毎日私を待っていてくれる。日の短くなった夕暮れの中を、ただ二人で帰る為だけに。

「なあなあ、やよちゃん！」

呼び声に振り返ると、彼氏が合掌のポーズをしてた。それは何の儀式？

「手のシワとシワを合わせたらうはい、なんて言うでしょ？」

「……………」

私の沈黙の意味にも気づかずに、

「もう『しあわせ』やん」

と、一人でご機嫌な彼氏さま。

だから？ 脈絡のない突飛な行動をニコニコ顔とする男に生暖かい笑顔を送る。

「でな、しあわせはイイことやねん」

「……………そうね」

本当に、私は何でこんな奴に魔なんか差したんだろ。

何だかやる気が失せた。もう今日はこの辺にしとこう、そう考えて掛けていた眼鏡をはずした。

窓辺に行き黄昏に沈む校庭を眺めていると、修吾も隣にやって来た。空が緋色から徐々に闇を深めていく。縹雲は西に流れ、半分だけ開けた窓からは秋風が吹き込んできた。その肌寒さに、ちよつとだけ温もりが欲しくなる。

手、握りたいかも……………。

いつも騒がしいのが黙ってるから何気なく顔を向けてみた。窓枠の影がかかった修吾は黒曜の双眸で静かに私を見つめていた。自分が知らない彼氏の『男の表情』に戸惑ってしまう。ふいに両肩を掴まれ修吾のほうを向かされた。まだ早いとか、唇荒れるかもとか様々な想いが脳裏で渦巻いたけど、早鐘のように高鳴る鼓動のまま自然と瞳を閉じる。

キスされる そう思ったのに、次の瞬間に私を襲ったのは柔らかい唇の感触ではなく、鼻への鈍痛だった。ありえない。人間の顔の中心には『鼻』という小高い丘があることくらい理解してて欲しい。

何だか一気に醒めた。

「はあ、バカみたい」

自分はこんな男に何をドキドキなんかしたんだか。これも魔が差したって言うのかも。

修吾のほうを見るとシヨンボリした顔で、

「ごめんな。ボク、カツコ悪……」

と、部屋の隅で膝を抱えている。修吾がカツコ悪いのなんか、いつものことなのに。

まったく。

「修吾。右手、出して」

「なん？」

「いいから早く」

「う、うん。はい」

子供っぽい言動とは裏腹に、良く育った男らしい手に自分の左手を寄せる。

「ほら、シワとシワを合わせたら『しあわせ』って呼ぶんでしょ？」

大きさの違う二人の手は上手くシワを合わせるのが難しいけど、

ようは気持ちの問題だ。修吾は一瞬だけ呆けたような表情をしてたけど直ぐに、

「えへへ、そうやね。しあわせや」

さっきまでの落ち込みようが嘘のように、くしゃっと顔を歪ませながら嬉しそうに笑った。ふと告白されたときのことを思い出した。今みたいに夕暮れのなかでOKの返事をしたとき、やっぱりそんな顔してたから……。

「でもな、やよちゃん」

不意に修吾が話しかけてきた。

「な、なに」

思い出に浸りそうになってた私は、思わず声が裏返ってしまつた。

「これも『しあわせ』って呼ぶけど、こうすると」

そう言いながら、合わせた指をズラして互いの手を握り合つた。俗に言う、恋人つなぎ。

呼び名は『しあわせ』

「ほらな。『めつちやしあわせ』や」

こんな単純で幼稚で下らなくて小っ恥ずかしいことに、何故か動悸が早くなってしまふ。可愛くない自分にも乙女心はあるらしい。

「……やよちゃん」

「何よっ」

気恥ずかしさを誤魔化すようにわざと無然と返事をした。そんな自分に修吾は優しく微笑みかけ、

「好きや」

そう囁いた。

知ってるわよ、バカ。

それから窓の外の夕月夜が見守るなか、鼻をぶつけないよう慎重にキスをした。今度は魔が差したわけじゃない。キスは柔らかく、そして私に温かな想いを抱かせた。この想いもまた『しあわせ』って呼び名かもしれない。

(後書き)

こんにちは、ユエです。

今回は『名小説』という企画で参加しました。

隠れテーマは『恋人同士の触れ合い』です。(別に隠してませんが)  
企画に興味のある方は『名小説』でキーワード検索してみてください。  
い。

よろしければ、ご意見ご感想をお聞かせください。

呼び名は『しあわせ』

呼び名は『しあわせ』

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0721c/>

---

呼び名は『しあわせ』

2008年11月7日06時44分発行